

【別添 1】

13	東京学芸大学附属世田谷小学校	R1～R5
----	----------------	-------

令和5年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

未来を創造的に生きる「学びを自分でデザインする子」を育成する、Laboratory・Home・Classの3領域で学ぶ教育課程及び学習環境デザインの研究開発

2 研究の概要（別紙1：研究の概要図）

次世代を担う子どもを育成するために「学びを自分でデザインする子ども」を育む教育課程を考えた。学びをデザインするとは、「学びが自分（たち）のものであると自覚し、学びの目標、道筋、表現方法を思考し選択している」ことと本校では定めた。

子どもが主体的に学びをデザインする領域として、LaboratoryとHomeの領域を設定した。Laboratoryにおいては、学ぶ内容も方法も、成果物の表現手段も子ども自身で選ぶ。Homeでは、1年生から6年生からなる異年齢集団で誰にとってもよりよい生活づくりを目指す。Classの領域では、教科固有の見方・考え方、問題発見や問題解決に資する資質・能力の習得とその過程を通して汎用的なスキルを習得することを目指す。

この3領域で学ぶことで、子どもは学びをデザインするための資質・能力を育みながら、それらを活かして探究的、創造的活動に繰り返し学びをデザインする。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

子どもが学びを自分でデザインするために必要な資質・能力を習得させ、それらが発揮できるデザイン実践する場を設けることにより、「学びを自分でデザインする子」を育むことができると仮説を立てた。

（2）教育課程の特例

各教科・領域における標準時数を減らし、その分を探究的な学習であるLaboratoryと異年齢集団で生活を共にしながら学ぶ場であるHomeを設定する。教育課程をLaboratory, Home, Classの3領域から成るものとする。

授業の基本単位として1時間分を40分間とする。

Laboratoryは、第3学年以上に前期と後期を設定し、開設準備期間を除き週4時間を基本とする。年間124時間（3年生は62時間）とする。

Homeは、水曜日を除き朝と昼に1時間ずつ行う。年間280時間とする。

Homeの時間が多いため、教科学習であるClassの時数を削減する。教科ごとの削減割合は異なるが、小学校6年間の各教科のカリキュラムを精査し、学びのデザインに支障がないように圧縮・削減する。詳しくは、別紙2教育課程表に載せる。

4 研究内容

（1）教育課程の内容

子どもが学んだことを自由自在に活かし、よりよい学びを起こす、延いて充実した人生を送ることを実現するために学びの意義を感じられること、学びにおいて自己効力感をもつことを図った教

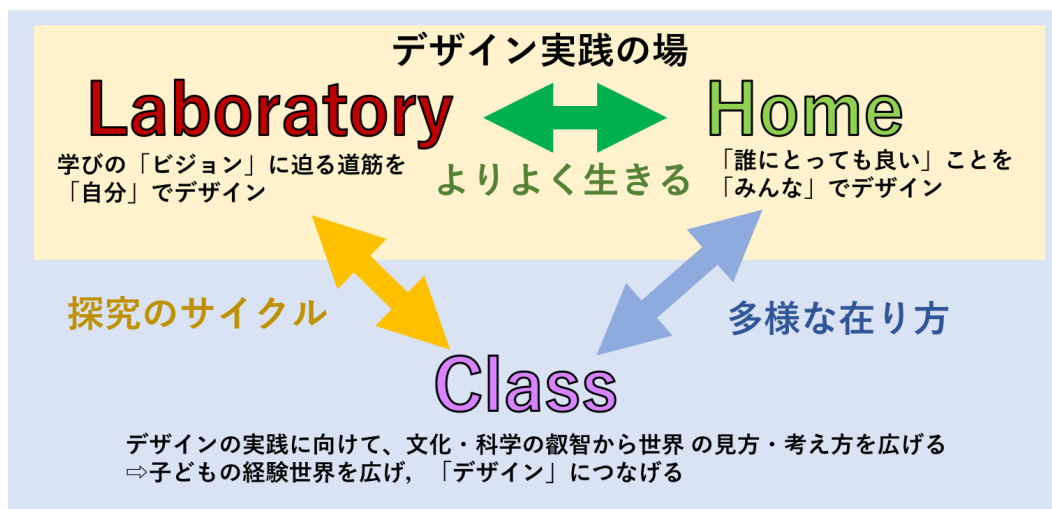
育課程を計画し指導を行う。

Class（教科学習）では、教科、学年、単元と区分けされた学習を行うが、子ども自身が区分けされた枠に囚われることなく見方・考え方や資質・能力を発揮することを促す。そのために、6年間の学習を内容面・技能面でのつながりを全教員で検討し、教科横断的・学年縦断的に組織することで、ある場面での学びが他の場面に関連させやすいカリキュラムを作成する。単元の指導計画を作成する際には、個人が考えをもつ段階、他者と対話をして考えを深化・拡張させる段階、学びを振り返り学び方自体をメタに捉える段階を設け、これを全学年・全教科において行う。ただし、知識・技能の習得が主となる単元もあり、この限りではない。指導方法では、上述した計画を実施するために一人一人が考えをもてる発問や教材、対話の必然性のある学習課題の設定、振り返りではタブレット端末でMetaMoji社「ClassRoom」を用いてポートフォリオを作成し、経年的にも活用できるようにする。

Laboratoryは、デザイン実践の場である。学びをデザインするとは、「学びが自分（たち）のものであると自覚し、学びの目標、道筋、表現方法を思考し選択している」としているため、学習内容は予め決めていない。Laboratoryでの探究内容が次のLaboratoryのきっかけになることもあるし、Classでの学習内容の深化・拡張がLaboratoryの種になることもある。外部から見て、ある基準に到達する学びではなく、子ども自身が学びをデザインしている状態を保ち続ける環境をLaboratoryとして教育課程に置く。しかし、子どもの選択すべてがLaboratoryとして成立するわけではなく、Classにおいて育ったであろう教科固有の資質・能力、働かせた見方・考え方の発揮、もしくは汎用的なスキルや態度・価値の発揮を各Laboratory担当教員が期待できなければ活動は成立しない。汎用的なスキル、態度・価値については、東京学芸大学が「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクト（2015から2017）において作成した尺度項目を用いる。Laboratoryの担当者は、期待したスキル・態度・価値が発揮できるよう子どもを支える。

Homeもデザイン実践の場である。Homeは1～6年生からなる異年齢の集団である。小学校における学び集団の成員の多様さを高めることにより、異質な他者を顕在化させる。その集団で何らかの意思決定をする際に、公正さを保とうとすると、年齢や能力、性別などの成員間の差異を考慮しなければならない。Homeでは生活をデザインするが、Laboratoryでの学習者個人が主体となるデザインと異なり、公共における自身の在り方に目を向けることが主となる。これはHome内のことだけでなく、校内のHome同士は同じ空間で生活を共にする関係であるため、Home間においても公正さ、公共性を念頭に生活デザインを行う。延いては、学校外の他のあらゆる集団との関係においても公正さ、公共性を考え意思決定や社会をデザインすることを期待している。生活デザインの機会を設けるために、日常的にHomeで食事や清掃、遊びを行う。また、入学や卒業の時期に儀式的行事をつくることや宿泊行事などをカリキュラムとして設定する。Home担当教員は子どもの生活デザインを見守りながら、公正さ、公共性が保てるように支援する。

3領域の関係を下に示す。LaboratoryとHomeはデザイン実践の場であるが、先述したようにLaboratoryにおいては、個が主体となり、Homeでは他者との関係性を軸として自己の在り方をデザインする。これは、将来的な個としての幸福追求と社会の維持・発展への参画への期待にも対応する。Classにおいて習得した見方・考え方や資質・能力を自在に使いこなすことがLaboratoryでの探究を支えること、Laboratoryでの学びの経験によりClassの学習内容である文化・科学の叡智に必要性や意義を感じることを図る。また、Classで一人一人が多様に考え対話を通して考えを深化・拡張させることが、Homeにおいて異質な他者を受容すること、Homeでの他者との関係性を軸としたデザインの経験がClassにおける異なる考えの受容や対話を支えることを図る。



下図は、週時程である。子どもは、Home 教室へ登校し朝の活動を行う。その後、Class 教室へ移動し教科学習を行う。教科ごとに教室が違うため毎時間、教室移動を行う。昼は Home にもどり、昼食をとり、Home の活動をする。火曜日と木曜日の 5・6 校時は基本的に 3～6 年生は Laboratory の時間になる。

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8:20~9:00	40分	Home (朝の会・Home活動)				
	10分					
9:10~9:50	40分	Class 教科学習 40分×4コマ×週5日 1・2年生：低学年総合 3～6年生：専科制（教員のいる教室に移動）				
10:00~10:40	40分					
中休み	20分					
11:00~11:40	40分					
11:50~12:30	40分					
12:30~13:50	80分	Home (給食・掃除・Home活動)				
	10分					
14:00~15:20	80分	Home 代表者会議	Laboratory		Laboratory	Home

Home では、上述したように異年齢集団でよりよい生活を目指し、デザインする。掃除や給食などの当番、係活動、遊びの在り方が、Home 領域の対象になるが、それらを検討する際には下の4点について考慮するように年度当初に子どもたちには伝えている。端的には、自分と同じような判断を誰が行っても良いだろうか、他の Home が同じようなことをしても良いだろうかという視点で常に振り返ることになる。月曜日の6校時には Home 代表者会議がある。Home 内だけで完結するのではなく、他 Home に情報を開示し自分達の小さな社会が

Homeで大事にする考え

- 1

年れいや性別などをこえて、みんなであつていく
- 2

「自分にとってよいこと」が「他人にとってよいこと」であるか話し合っ決めて
- 3

自分と自分以外のすべての人のことを考える
- 4

約束は、よりよいものに向けて新しくしていくことができる

透過性をもっているか確認する。各種行事の内容や進捗の確認もここでされる。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「学びを自分でデザインする子」を育むための教育課程の編成についての検討 ○新設「じぶんdeラボ」と「みんなdeラボ」 ○校内授業研究会の実施 ○本校の研究開発課題に関わる研究開発指定校の視察（1人1回） ○公開授業研究会の実施（1月31日（金）） ○「じぶんdeラボ」の時間の試行の反省を踏まえた2年次の教育課程の構成と研究開発組織の再編 ○「みんなdeラボ」の時間の実施方法の検討
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「学びを自分でデザインする子」を育成する学校としての理念や哲学の構築 ○主体的で民主的な研究運営・体制への変革と意思決定システムの見直し ○各教科学習の質を高め、新設時間の開始に伴う、教員の働き方の改善のための教科担任制の導入の是非の検討。 ○「研究室」によるLaboratory（「じぶんdeラボ」及び「みんなdeラボ」）の実施と細やかな情報共有を通じた具体的な実施計画の立案と実施、修正を通して成果と課題の明確化。 ○「みんなdeラボ」の異学年集団で協働的に問題を発見したり、解決したり、リーダーシップやフォロアーズを發揮していくような機能を実現する枠組み（Home）の構築 ○研究部及び学習資料部によるオンライン学習システムの検討 ○先進的な研究をしている学校の視察や研究会、研修への参加 ○校内授業研究会におけるLaboratoryの学習環境デザインの研究と児童の評価方法の検討
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ○これまでの研究を経て「学びを自分でデザインする子」の育成する教育課程の全面実施（4月） ○保護者説明会の実施（4月） ○校内研究授業（6月、9月、10月） ○研究発表会にむけて、研究の総括（12月） ○研究発表会（2月18日） ○Laboratory, Home, Classにおける課題の整理と次年度への改善案の策定（3月）
第四年次	<ul style="list-style-type: none"> ○第3年次までの研究を経て「学びを自分でデザインする子」の育成する教育課程の改定実施（4月） ○運営指導委員会（5月、8月、12月）の実施 ○校内研究授業（5月） ○研究発表会（6月18日） ○研究開発学校事業最終年度以降の学校の在り方の検討（6月） ○本研究の継続に関する検討（9～1月）

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ○運営指導委員会の開催（5月, 8月, 2月） ○「学びを自分でデザインする子」の評価方法の検討 ○校内授業研究会の実施 ○「学びを自分でデザインする子」を育むための新たな教育課程における各教科や新設時間で育てたい資質・能力の整理とそれに伴う教科の主要な概念の抽出及び教科間で架橋することができると思定される概念の整理 ○公開授業研究会の実施（1月31日(金)） ○抽出学年である第3学年の現状の調査方法の検討と実施 ○「じぶんdeラボ」の時間の試行の反省を踏まえた2年次の教育課程の構成と研究開発組織の再編
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「学びを自分でデザインする子」を育成する学校としての理念や哲学の構築 ○主体的で民主的な研究運営・体制への変革と意思決定システムの見直し ○1年次に計画した教育課程を実施し、「教科の本質」を明確にしたカリキュラムが新設時間「じぶんdeラボ」及び「みんなdeラボ」にどのように影響を及ぼすのか, またその逆に教科学習にどのような影響を及ぼすのか, そして子どもの学びの質は本当に保証できたのかを検証し, その成果と修正すべき課題を明確にする。 ○各教科学習の質を高め, 新設時間の開始に伴う, 教員の働き方の改善のための教科担任制の導入の是非の検討。 ○「研究室」によるLaboratory（「じぶんdeラボ」及び「みんなdeラボ」）の実施と細やかな情報共有を通じた具体的な実施計画の立案と実施, 修正を通して成果と課題の明確化。 ○学びを自分でデザインする子を育成する評価のあり方の検討 ○先進的な研究をしている学校の視察や研究会, 研修への参加 ○運営指導委員会（6月初旬・11月中旬・2月中旬）の開催 ○抽出学年である第4学年の現状調査 ○校内授業研究会におけるLaboratoryの学習環境デザインの研究と児童の評価方法の検討 ○各委員会の定例開催と年度末評価 ○保護者説明会の実施（4月・3月）
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「学びを自分でデザインする子」を育成する評価方法, 教育課程についての共通理解づくり（4月末） ○校内研究授業（6月, 9月, 10月） <ul style="list-style-type: none"> スポーツラボ 食ラボ プロフェッショナル・ラボ ○児童アンケート（「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトでの汎用的スキル, 態度・価値の測定尺度の援用）の実施（全学年, 5月, 9月, 12月） ○「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトでの汎用的スキル, 態度・価値の測定尺度のついて作成者（運営指導委員）からの助言（7月） ○Laboratory, Home, Classの学習環境デザインの研究と児童の評価方法についての

	共通了解づくり（8月） ○文部科学省によるオンラインヒアリング（8月） ○運営指導委員会（8月・12月・3月）の実施 ○研究発表会にむけて、研究の総括（12月） ○研究発表会（2月18日）
第四年次	○運営指導委員会（5月, 8月, 12月）の実施 ○校内研究授業 第5学年 家庭科（5月） ○研究発表会（6月18日） ○研究開発学校事業最終年度以降の学校の在り方の検討（6月） ○本研究の継続に関する検討（9～1月） ○児童アンケート（ClassとLaboratoryのつながりについて, Homeとはどのような時間・場所かについて）の実施（全学年, 12月）

5 研究開発の成果

（1）実施による効果

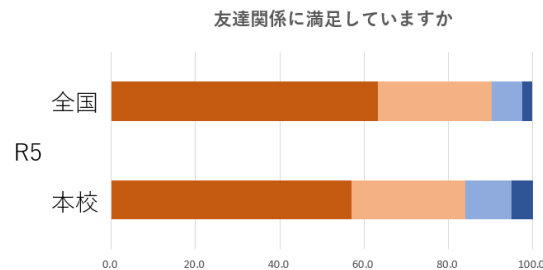
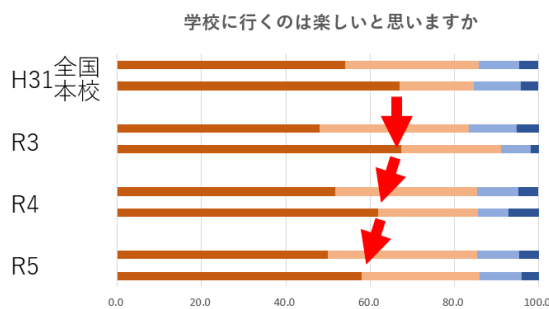
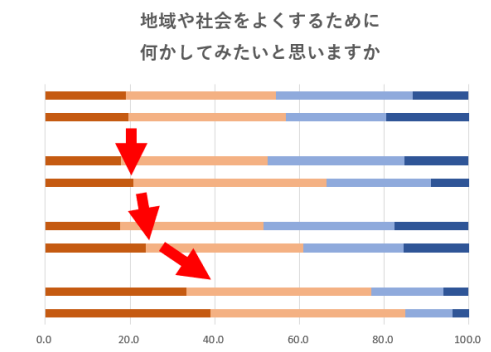
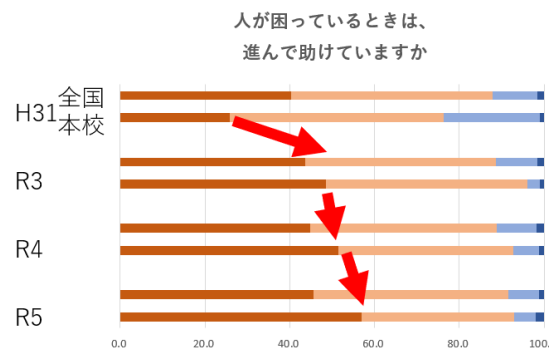
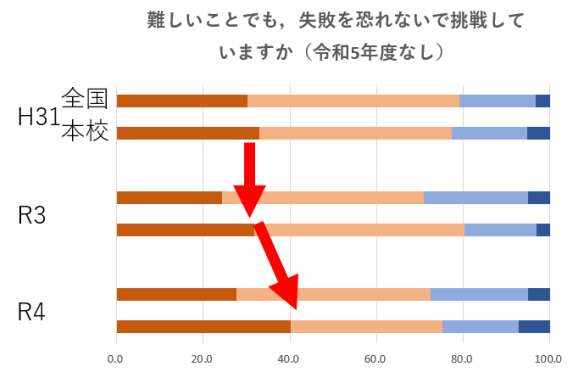
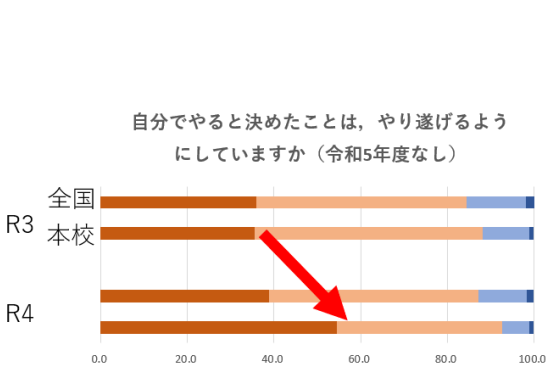
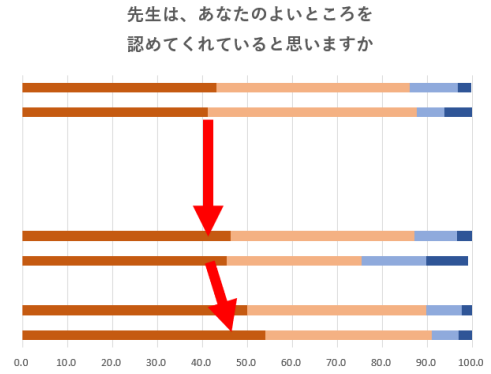
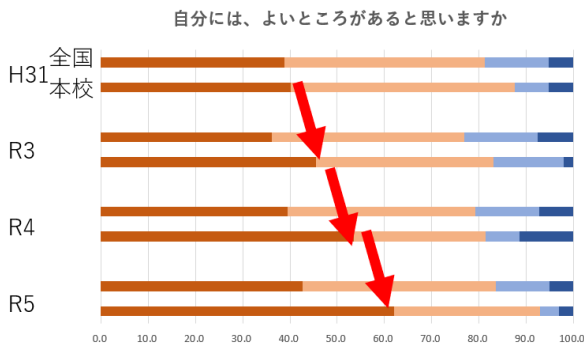
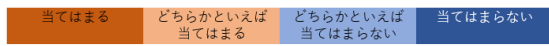
・児童における変化

全国学力・学習状況調査からは、自己肯定感、責任感、チャレンジ精神、学習の活用、他者への共感性と援助行動、社会をよりよくする態度などにおいてポジティブな変化が見られた。ネガティブな変化としては、学校へ行くことの楽しさ、友人関係への満足度が下がった。

児童が活動する領域が Laboratory, Home, Class と複数になり、個人のもつ長所を出すことができる機会が増えたこと、複数の教員が関わり多面的に評価することで児童が承認される観点が増え自己肯定感の向上に影響していると考えられる。

Laboratory や Home では、試行錯誤する時間が保障されており、そこでの自己決定の機会や失敗を振り返り、次の改善に挑む様子が見られた。また、Class で学んだ教科学習の内容や見方・考え方を使うことが増えた。これらのことが、責任感、チャレンジ精神、学習の活用度合いに影響を与えたと考えた。Home では、異年齢による他者との異質さが目立つ環境であり、違って当たり前であることを前提とする指導をしている。同級生の目を気にするような同調圧力や集団内の優劣を競争するような圧力も同学年集団よりも低い。これらの影響か、食事や掃除、遊びなどの生活面では援助行動を起こしやすいし、援助要請もしやすいと考える。このことが、他者への共感性や援助行動への意欲になっていると考えた。

Home で生活することは、上述したような面もあるが、自分勝手や仲間内だけの心地よさは認められない。学校内での Home の時間を設けたことにより、これまで学級や学年で行っていたような運動会や宿泊行事などは目的も方法も変更した。そのことを惜しむ声が高学年（現6年生は、4年生までは従来の教育課程で学んだ）の児童や保護者を中心に散見される。このことは学校の楽しさや友人関係への満足度に負の影響があると考えられる。



・教員における変化

前項で述べた変化は、教員へのアンケートにも多く見られる。関わる児童が増えたことにより、顔と名前が一致する児童が増え、学校全体で児童の育成に臨んでいる感覚は以前よりも強まっているように感じる。これにより、児童からのあいさつや会話も増えた。

以前は学年・学級での矮小化された範囲で最適化が図られる面があった。現体制では、教科担任

制であり、Home 制であるため以前よりも個々の教員が最適化できる範囲が狭まっている。教員にとってはこれまで慣れ親しんだ学級経営や指導法が通用しないことにつながり、学び直しや価値の転換を行う必要もあった。これを新しい価値の発見ややりがいと捉える教員とストレスを感じたり、非合理的と判断したりする教員もいた。

・学校運営における変化

教員個人の裁量が狭まったことは上で述べた。個々の教員の影響力が均されることと共通の判断基準をもって指導に臨むことは、児童の様子とアンケート結果から概ね、ポジティブな要因になっていると考える。学校運営上も、透明性が高まり、一部の業務の効率化にもつながる。教員の指導力や内容の差による不平等感も薄まり子ども、保護者にとってもより平等で公正な学校運営につながる。

教科担任制や Home 制によって、教務上の時間割作成や学校内外への連絡、学籍管理、会計などのシステムが変更になり令和4年度の3領域全面実施初期には混乱と疲弊を招いたが、2年目は低減することができた。これらは継続的に改善することが可能である。

・保護者における変化

令和4年度の3領域全面実施時の6年生は最後の1年間で新教育課程に変わり、また新型コロナウイルス対策のため様々な活動が制限された。こうした状況は、保護者に失望と混乱を生じさせる要因となった。

Laboratory においては、児童の好きなことができている楽しそうであることや学びをデザインすることの価値への共感から9割近く肯定的な評価を受けている。一方で、自主的に学ぶことが難しい児童も2割ほどはいるため、手厚い支援を望まれている。保護者も新しい価値観をもつ教育課程のため、家庭での支えが教え込むことになるのではないかと戸惑う意見もアンケートには見られる。

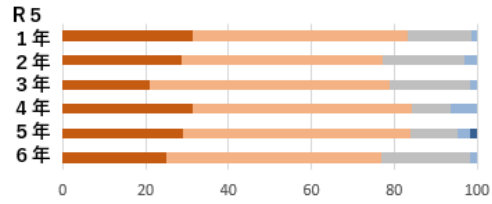
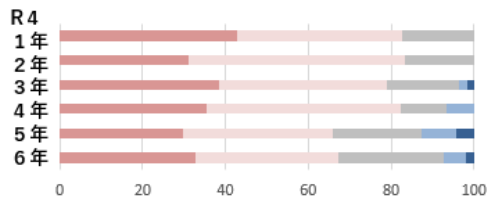
Home は、異年齢でいることの意味や価値は概ね通じ、支持されている。上の学年が良い見本になり、モデルとなることへの肯定もあった。しかし、Home の理念が満たされず、対話でなく、年齢や身体や声の大きさに意思決定が行われた場面も実際に起きてしまい、そのような体験をした児童、保護者は不安や不満を感じる。このようなことが起きないように指導と起きた場合にはその後の支援を丁寧に行う必要がある。

Class については、定期的なテストや面談で児童の学習状況が具体的にわかるようになったこと、教科担任制で授業の専門性が向上したことによる児童のポジティブな反応などから肯定的な意見が見られる。Home と Laboratory の設置により Class は授業時間数が標準時数よりも少ないため基礎学力の定着や中学校への進学の際の試験などにおいて不利益であるという否定的な意見もある。教科担任制のため教室移動や学習用具の管理などは従来の教育課程よりも複雑になっているため、非効率的であるという意見がある。

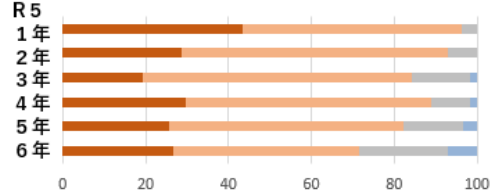
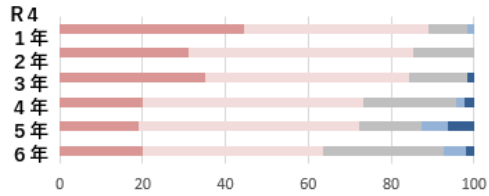
様々な教員が関わることの利点を上述したが、相談するための窓口が分かりづらいことや、面談を行う Home 担任があまり情報を持っていないという不安や不満もあった。

なお、保護者アンケートの回収率は高くなく、6割程度である。

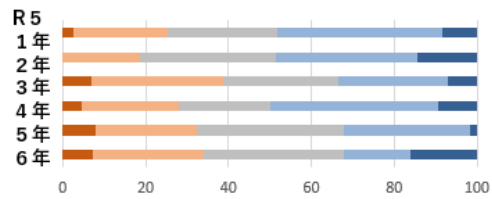
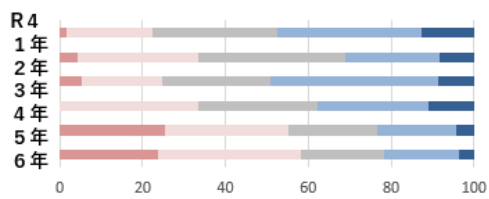
「Home」の時間において自ら意欲的に生活に取り組んでいると思いますか



「Home」の時間について新しい発見や成果はありますか

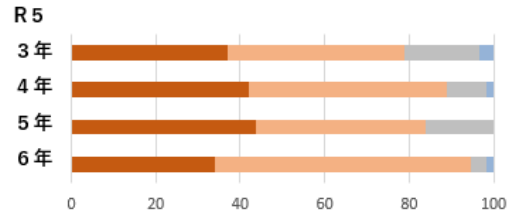
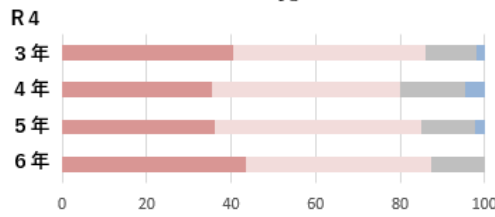


「Home」の時間について不安や課題はありますか

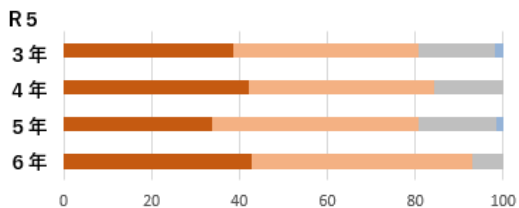
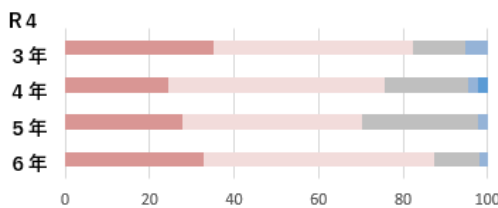


とてもそう思う そう思う どちらとも言えない そう思わない まったくそう思わない

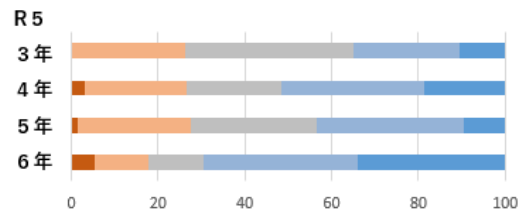
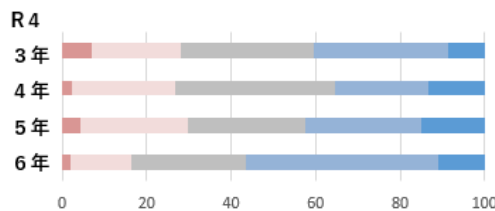
「Laboratory」の時間において自ら意欲的に研究に取り組んでいると思いますか



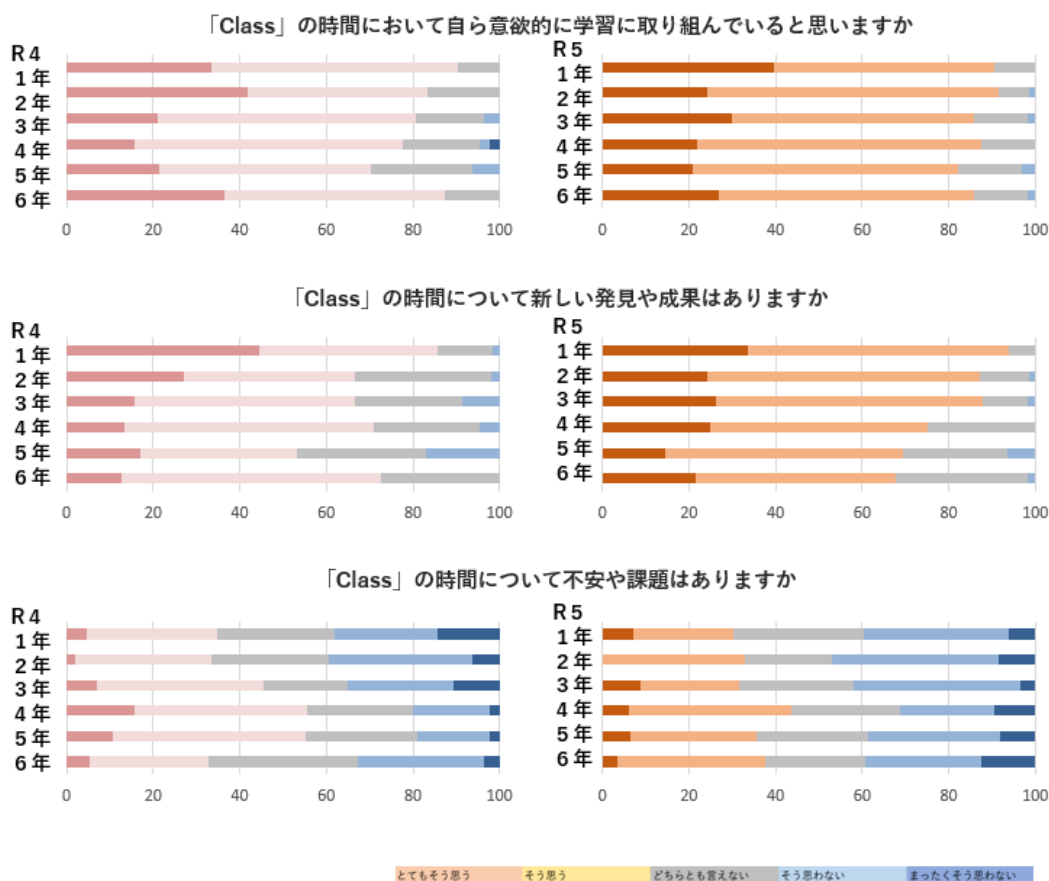
「Laboratory」の時間について新しい発見や成果はありますか



「Laboratory」の時間について不安や課題はありますか



とてもそう思う そう思う どちらとも言えない そう思わない まったくそう思わない



(2) 実施上の問題点と今後の課題

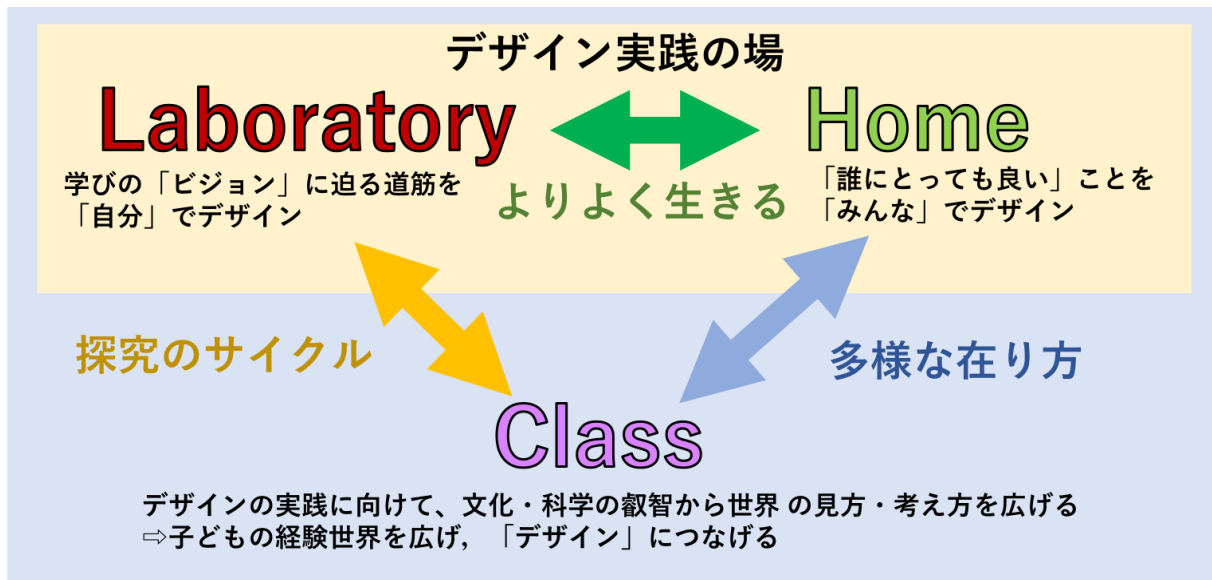
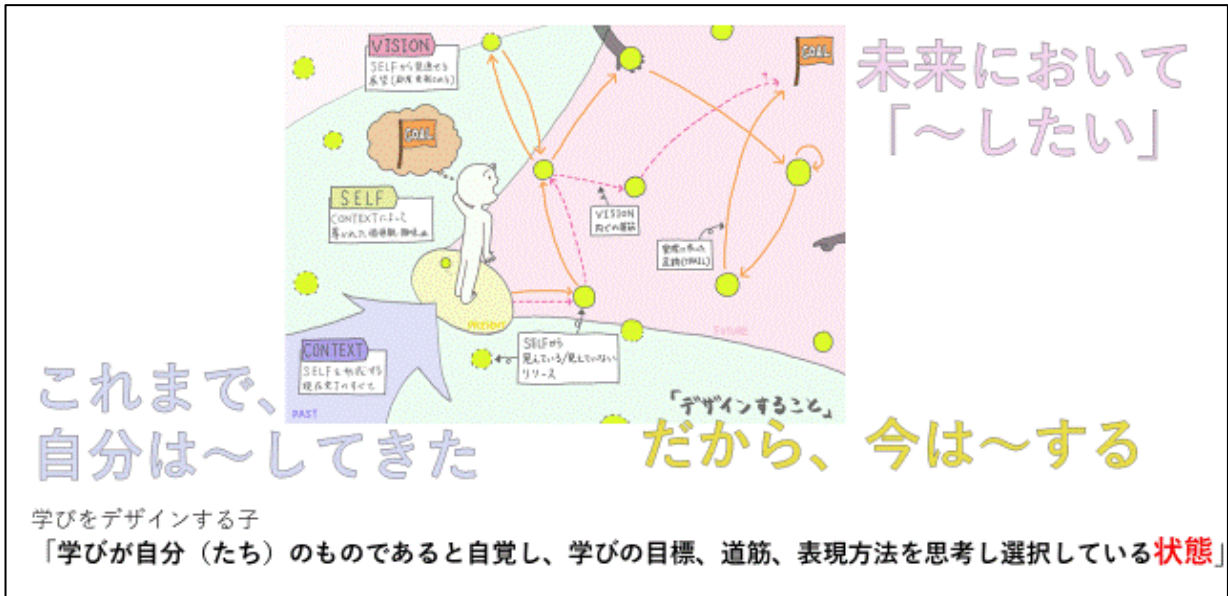
教育課程に大きな変更を加えたことによる変化も大きく、成果も見られたが課題も多く残った。児童、保護者の幸福を願い、丁寧な説明をして了解を得ることはどこまで行っても不十分であるため、反省とともに今後も励む。学校内の教職員にとっても変化は大きく、これも誠実に重ね続けていくようにする。

Home 制を実施したことに抜本的な変化は成果として明確に出ている。全国学力学習状況の調査において教員の実感を裏付けている。しかし、この成果は、Class 時数の削減や従来の教育課程にあった活動の削減などがある。一般化するには、精査が必要であることと、規模や程度の検討が必要である。

Laboratory も Home も探索的に実施し、実感としての成果はあるものの公教育にとって妥当であるための評価に関しては十分にできていない。教科学習である Class での学びが Laboratory でのデザインの基になっていることが児童アンケートからもわかるが、その相関や因果は明らかではない。

今後は、本研究の課題を真摯に対応しつつ、成果として見られたことについて精緻化・一般化していき、児童と保護者、公教育と地域へ還元することを図る。

2 研究の概要（別紙1：研究の概要図 ※様式自由）



【別添1】－別紙2

東京学芸大学附属世田谷小学校 教育課程表（令和5年度）

	Class										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	Laboratory	Home	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語							
第1学年	227 (-79)	/	107 (-29)	/	68 (-34)	44 (-24)	44 (-24)	/	80 (-22)	/	0 (-34)	/	0 (-34)	/	280 (+280)	850	
第2学年	230 (-85)	/	150 (-25)	/	70 (-35)	52 (-18)	52 (-18)	/	76 (-29)	/	0 (-34)	/	0 (-35)	/	280 (+280)	910	
第3学年	168 (-77)	53 (-17)	116 (-59)	71 (-19)	/	53 (-7)	53 (-7)	/	93 (-12)	/	0 (-35)	31 (-4)	0 (-70)	0 (-35)	62 (+62)	280 (+280)	980
第4学年	175 (-70)	58 (-65)	108 (-67)	71 (-34)	/	53 (-7)	53 (-7)	/	62 (-43)	/	0 (-35)	31 (-4)	0 (-70)	0 (-35)	124 (+124)	280 (+280)	1015
第5学年	98 (-77)	71 (-29)	105 (-70)	76 (-29)	/	44 (-6)	44 (-6)	53 (-7)	58 (-32)	62 (-8)	0 (-35)	/	0 (-70)	0 (-35)	124 (+124)	280 (+280)	1015
第6学年	98 (-77)	86 (-19)	95 (-80)	71 (-34)	/	44 (-6)	44 (-6)	49 (-6)	62 (-28)	62 (-8)	0 (-35)	/	0 (-70)	0 (-35)	124 (+124)	280 (+280)	1015
計	996 (-465)	268 (-97)	681 (-330)	289 (-116)	138 (-69)	290 (-68)	290 (-68)	102 (-13)	431 (-166)	124 (-16)	0 (-209)	62 (-8)	0 (-280)	0 (-209)	434 (+434)	1680 (+1680)	5785 (0)

※ 授業時数, 単位数の増減等については, 表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど, 教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

【別添1】－別紙3

学校等の概要

1 学校名, 校長名

学校名 とうきょうがくげいだいがくふぞくせたがやしやうがっこう 東京学芸大学附属世田谷小学校

校長名 おいかわ けん 及川 研

2 所在地, 電話番号, FAX番号

所在地 〒158-0081 東京都世田谷区深沢 4-10-1

電話番号 03-5706-2131

FAX 番号 03-5706-2144

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数, 学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
105	3	102	3	102	3	101	3	97	3	101	3	608	18

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数

(高等学校の場合)

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	〇〇科										
	××科										
	計										
定時制	△△科										
計											

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	2	0	21	0	2	0	1	10
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
0	1	2	1	42						

5 研究歴

記載する事項なし